

英 語（リスニング）

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前 文

令和4年度大学入学共通テストの「英語（リスニング）」の受験者は、本試験が479,040人（昨年度の共通テスト(1)は474,484人）で、受験者全体の約98.3%（昨年度は98.3%）に当たる。このことは、本テストの実施そのものや、問題の質や難易度、使用される言語材料等が、受験者のみならず、全国の高等学校関係者及び英語教育関係者等、多方面に与える影響が非常に大きいことを意味している。満点は「英語（リーディング）」と同じ100点であり、平均点は59.45点であった。

「英語（リスニング）」について検討・評価した項目は、14ページに記載の8つの観点についてである。また評価にあたり、以下の5つの資料を主に参考とした。

- ・高等学校学習指導要領解説（平成21年告示）外国語編・英語編
- ・令和4年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト問題作成方針
- ・「コミュニケーション英語Ⅰ」、「コミュニケーション英語Ⅱ」、「英語表現Ⅰ」の検定教科書
- ・令和3年度大学入学共通テスト「英語（リスニング）」（共通テスト(1)）
- ・令和3年度大学入学共通テスト 試験問題評価委員会報告書（共通テスト(1)）

2 内 容・範 囲

本試験と同様に「コミュニケーション英語Ⅰ」「コミュニケーション英語Ⅱ」「英語表現Ⅰ」で取り扱われる範囲からの出題であり、日常の問題から社会問題まで、幅広い分野における情報整理や話者の意図をくみ取って解答したり、講義等の内容と図表を統合して解答する問題であった。

第1問A 話題は日常生活で想定されるものが主であり、受験者にとっては理解がしやすい内容で適切。高校の授業において学習する範囲内の内容である。一方で、英語自体は平易であるが状況を理解して含意を理解する必要があるものが多い。言語には表れない状況と含意を汲み取る力を試す力、文脈から判断する力、思考と判断力を要する問いである。ただし、問3のように海外で地図を使って行動する機会が減った現代にはあまり合わないと思われる場面設定も見られた。

第1問B イラストが思考を助ける役割を果たしており、Aより平易であった。日常生活においてありそうな食事の話題、状況説明、衣服の描写など内容は、受験者は理解しやすかったと思われる。

第2問 日常生活の馴染みのある内容について、短い対話を聞き、適切なイラストを選ぶ設問。状況を理解した上で、場所や物、図での位置を判断する力を測る。イラストの助けを借りつつ、聴解しやすいことが表れていた。また、教科を超えた学習内容を活用できる問いもあった。

第3問 受験者の身の回りでよくありそうな場面設定で、前の問題よりやや長めの会話を聞いて答える設問である。病院の予約を取ったり、コンピュータのログインができない状況での会話やコンサートの感想を述べる話題など、親しみやすい内容であった。問16については、ログインについて話す順序が、パスワードの次にusernameを聞いているため、実際のログインの手順としては逆なのではないか。パスワードを友人には話さないことを考えると致し方ないが、やや不自然さを感じる。また、問15については、より多様な文化に触れるような内容であってもよかったのではないか。

第4問A 二つの音源があり、一つ目はStorytellingで男性のクリスマスの思い出が語られる。馴染みのあるクリスマスが題材であり、話の展開を理解しやすいものであった。二つ目はボランティア活動の説明を聞くものであったが、留学をしてボランティアに関わるという状況設定が評価できる。ただし、内容的に男女での分類を扱うところは、ジェンダーへの配慮がさらに必要になると考えられる。

第4問B 4人がそれぞれ推薦する本のことを話している内容で、多様な英語話者も含まれたが、受験者には親しみやすいものであった。ページ数、本の新しさ、ノンフィクションかどうかという内容を聞き取るものであった。

第5問 講義内容はギグ・ワークというあまり馴染みがあるトピックではなかったため、受験者にとってはかなり難しかったと思われる。もし最初のところでギグ・ワークの具体例が紹介されていたら、さらに理解度が高まっていたのではないか。

第6問A 二人の料理についての異なる考え方を話す対話を聞き、設問に答える。第5問の講義の後、日常生活の料理という馴染みのあるトピックで、最後にクスッと笑いたくなる部分もあった。

第6問B 四人の学生が意見交換をする問題。実際に海外の大学などで多様な英語話者と対話をする時に起こるような状況で会話が行われる。トピックはエコツーリズムであり、環境問題への配慮と経済活動の両立について語られる。最後がやや雰囲気が変わりすぎて不自然に感じられる。

3 分量・程度

読み上げの回数は昨年度と同様、第1問～第2問は2回、第3問～第6問は1回であった。大問数が6問、設問数が37問、解答数が37と問題構成も昨年と同様であった。また、スクリプトの総語数もほぼ同じで約1500語。音声についても昨年同様、イギリス英語や英語を母国語としない話者によるものも含まれていたが昨年よりも全体的に発音が明瞭で聞きやすかった。

第1問A 4問が出題され、読まれる英文は11～14語と負担にならない分量であった。解答時間は約5秒。標準的な単語や表現を使っており、難易度は全体的に易しめであったが、問3は状況が分かりにくいこともあり、正答率は低かった。

第1問B 3問が出題され、読まれる英文は10～12語と短い。解答時間は約5秒。4つのイラストの差が分かりやすく書かれているので、いずれの問題も難易度は低く、正答率は高かった。

第2問 4問が出題された。対話の場面が日本語で与えられ、対話のやり取りは4回に統一され、総語数は30語以内、その後5～8語の質問が流れる。質問後の解答時間は約5秒。質問文は書かれていない。日常でよくありがちな場面を扱っているので答えを見付けやすく、いずれの問題も難易度は低く、正答率は高かった。

第3問 6問が出題された。対話の場面が日本語で与えられ、質問文も書かれている。解答時間は約8秒。対話のやり取りは5～7回と、第2問より多くなっている。問12～16は難しくなかったが、問17は選択肢が直接的でなかったためか、正答率は低かった。

第4問A 問18～21は、最初に問題文と図表を読む時間が約10秒あり、その後93語の英文が1回放送され、図表を時系列に並べる。解答時間は約12秒。出来事が順番に出てくるので、正答率はかなり高かった。問22～25は、最初に問題文と表を読む時間が約18秒あり、その後78語の英文が1回放送される。選択肢を2回以上使うことも可能である。解答時間は約37秒。問22の正答率はあまり高くなかったが、それ以外の問いの正答率は高かった。

第4問B 最初に状況と条件を読む時間が約18秒あり、40語前後の4人によるモノローグが流れ、条件に合うものをひとつ選ぶ問題。いずれの英語も聞き取りやすかった。解答時間は約10秒。正答率は高かった。

第5問 最初に読む時間が約53秒あり、その後、約250語、140秒ほどの講義が流れる。その後、問27～32の解答時間は約65秒。続いて、約50語の講義の続きを聞き、問33に答える。解答時間は約27秒。問33のグラフは昨年とは異なり、2つであった。講義の英文も問題も難しく、正答率は低かった。

第6問A 最初に状況と問いを読む時間が約10秒あり、その後約70秒の15回のやり取りを聞き、それぞれの考え方を聞き取る。解答時間は約20秒。標準的な難易度で正答率も平均的であった。

第6問B 最初に状況と問いを読む時間が約15秒あり、その後約2分の4人の会話を聞き、問いに答える問題。解答時間は約30秒。英語がアメリカ英語だけではないことで、4人の聞き分けができ、問36の正答率は標準的であった。問37の正答率は低かった。

4 表現・形式

第1問A 短いモノローグに合う英文を選ぶ設問形式。状況説明がないため、分かりにくい問題があった。特に問3は、どのような状況での発話か理解しにくい。また、問1ではweren'tが聞き取りにくかった受験者がいたようである。選択肢は、問4以外“The speaker..”に統一されている。

第1問B 短いモノローグに合うイラストを選ぶ設問形式。正答率は第1問Aより高く、warm-upとして、順番を入れ替え、この形式の問題を第1問Aとしても良いのではないかと問5は、最後の文がなくても正解にたどり着けると思われる。

第2問 短いダイアログに合うイラストを選ぶ設問形式。状況は説明されているが、問いは書かれていない。1回目の質問後に2回目のダイアログを聞くことができ、正答率は高い。問10に、crossed out, iron等の馴染みがあまりなさそうな語句もあったが、イラストの助けもあり正答率は高かった。問11の“I'd rather not”や“Isn't the sound..”という否定の疑問文が理解しにくかったためか、正答率が他の問いより低かった。

第3問 短いダイアログを聞き、問いに答える形式。状況が説明され、問いも書かれているので、ダイアログを聞く前に問いを読んでおくことで、正答率を上げることができるだろう。アメリカ英語以外の話者も含まれていたが、聞き取る上で大きな影響はなかったと思われる。問11では否定表現won't, can'tや、動詞のlast, 接続詞のOnceが使われているためか、多少正答率が低かった。問16は、usernameがstudent number、つまり数字であるという状況に混乱した受験者もいた可能性がある。問17は、動詞のlastの意味が瞬時に判断できなかった可能性がある。また、④のcould have beenを勘違いしたこと、男性の、演奏には満足していたが短かったという感想が、③のpoorに当たると考えた受験者もいたと思われる。

第4問A 問18～21は放送文の内容のイラストを時系列に並べる形式。出来事を出てきた順番に並べることで正解できるので、正答率は高かった。一捻りしても良かったと思われる。問22～25は指示を聞き、それぞれの衣服を該当する箱に入れる問題。問22の正答率が他より低かったが、down jacket = winter clothesが結びつかなかっただろうか。

第4問B 4人の説明を聞き、状況に合うものを選ぶ問題。状況は日本語で書かれており、放送が始まる前に、条件を理解しておけるかがポイントであろう。アメリカ英語以外の話者も含まれていたが、受験者にとってはそれほど問題にはならなかったようである。

第5問 講義を聞き、ワークシートにまとめる形式。ワークシートは講義の流れに沿って整理されている。講義のレベルが高いこと、1回しか放送されないことに加え、トピックが「ギグ・ワーク」という馴染みのない内容だったため、ついていけなかった受験者も少なくなかったと考えられる。講義の中でギグ・ワークの説明もされているが、理解しやすい例があれば、理解は格段に上がったであろう。また、講義の中でギグ・ワークの例として挙げられている、タクシー運転手や

配送業は、日本ではギグ・ワークと言うより定職のイメージがあるのではないかと。また、選択肢にpermanent employment, sacrifice, guarantee, additional, obstacle等、難しめの語彙も含まれていた。講義の続きを聞く問33では、2つのグラフが提示されたが、講義の続きとグラフに加え、最初の講義の内容も理解できていないと、正解にたどり着けない難しい問題であった。

第6問A 長めのダイアログを聞き、それぞれの主張を聞き取る問題。ダイアログは難しいものではなかった。問35の問いが漠然としているように感じられた。問34同様、主張を問う問題で良かったのではないかと。正答率はやや高めであった。

第6問B 「エコツーリズム」に関する長めの4人の会話を聞き、賛成している人数を選ぶ問題と、ひとりの考えの根拠となるグラフを選ぶ問題。4人は男女2人ずつであったが、アメリカ英語以外の話者も含まれていたため、聞き分けやすかったように感じられた。問36は、どうしても「2人が正解」になりがちなので、中立的な意見を入れたり、賛成している人の組合せを選ぶ形式にすることも考えられる。問37は難易度は高い問題であったが、聞き取りの理解度を測るには良問だったと思われる。

5 ま と め（総括的な評価）

聞こえてきた音声を文字通りに理解するだけでなく、状況に応じての含意を汲み取り理解する力が求められ、思考力、判断力、表現力等を要する内容である。高校現場として、英語を実際のコミュニケーションで使う場面、状況を想定し、生徒自らがそれを体験するような統合した言語活動を行う授業設計を促進し指導の在り方を追求していく必要がある。

(1) 形式等の特徴

実施時間は30分、1問あたりの配点は1～4点の幅があり、読む回数は2回読み（第1問と第2問）と1回読み（第3問～第6問）に分け、満点は100点であった。昨年度に引き続き、本テストでは「リーディング」と「リスニング」がともに100点満点で構成されていたことから、より英語4技能のバランスを意識したものであったと評価する。また設問や場面設定の指示が日本語で記載されている点は、測る力を「聞く力」に集約するための措置として有効であると考えられる。読む回数については、試験前半における2回読みについては、受験者の負担を考慮するとなされるべき配慮とも捉えることができる一方、聞く内容から判断すると、第2問における日常的な会話については読む回数を1回に、また、第5問での講義の内容を聞き取りワークシートや図表をあわせて答える問題については、読む回数を2回とすることも今後検討していくべきかもしれない。

(2) 学習指導要領との整合性

本テストでは、モノログ、2人の対話、講義、4人の討論といった様々な場面や状況が設定された。またイギリス英語や英語を母語としない話者の音声も使われ、多様な話者による現代の標準的な英語が使用されている。学習指導要領に明記されているように、様々な英語が国際的に広くコミュニケーションの手段として使われている実態への配慮がなされていると評価できる。

(3) 高等学校の授業改善への影響

本テストでは、与えられた状況やコミュニケーションの場面における発話から情報を整理し、内容全体から話者の意図等を把握する、思考力・判断力・表現力等を問う出題が多く見られた。

授業では、様々なタイプの英語を聞いたり読んだりする活動はもとより、聞いたり読んだりした内容について話したり書いたりするような活動を十分に行うことにより、話される内容を一度で正確に聞き取る力の伸長が図られる。特に、本テストにおける第5問、第6問については、「聞く力」だけに特化した指導ではなく、残りの3技能と統合した言語活動を十分行う必要がある。

るというメッセージを伝えうる問題である。聞いた内容を別の表現で言い換えたり、まとめて表にするなど、具体的な指導方法の充実につながるものであった。

(4) 要望・提案

今後も、ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）を参考に、各CEFRレベルにふさわしいテキスト作成と設問設定を行うことでA 1からB 1レベルに相当する幅広い題材を扱う問題の作成を願う。

内容については、受験者の身近な暮らしや社会での暮らしに関わる題材で、日常生活で用いられる自然な表現を採用したり、高校や大学生活等におけるコミュニケーションの場面や話者の多様性を想定する中で、例えば第1問のような短い英文であっても、より場面や状況を把握しやすい工夫を取り入れることを願う。また、受験者の持つ背景知識の程度により、聞き取る内容の理解に大きな差ができないようさらなる工夫を願う。例えば、第5問における「ギグ・ワーク」に関する講義という設定において、比較的后半で説明される具体例を第1段落に含むことで、受験者の理解度がよりすすんだことが想定される可能性がある。また、第6問の間36にある賛成者、反対者等を問う設問に関連して、それぞれの登場人物の立場を明確に識別できる音声的な工夫の必要性はもちろんだが、今回はみられなかった中立的な立場の設定を設けることで、4人の討論をまとめるようなはたらきを加えることで、全体の内容が理解しやすくなることも想定できるため、より多様な場面、状況設定についても検討願いたい。

出題内容と設問数、配点一覧（*は、全部正解の場合のみ点を与える。）

設問及び出題内容				設問数	配点			難易度	
大問	中間	小問	出題内容概要		小問配点	配点			
第1問	A	1-4	モノローグ（短）：状況に合う短文を選択	4	7	4	16	25	☆☆
	B	5-7	モノローグ（短）：状況に合うイラストを選択	3		3	9		☆
第2問		8-11	対話（短）：対話後の質問に合うイラストを選択	4	4	4	16	16	☆
第3問		12-17	対話（短）：書かれた質問に合う答えを選択	6	6	3	18	18	☆☆
第4問	A	18-21	モノローグ（中）：イラストを時系列に並べる	4	9	4*	4	12	☆
	A	22-25	グラフと表への情報付加	4		1	4		☆☆
	B	26	モノローグ（中）：4人のモノローグを聞き状況と条件に合う答えを選択	1		4	4		☆
第5問		27	モノローグ（長）：講義を聞き、ワークシートへの情報付加、要約選択	1	7	3	3	15	☆☆☆
		28-29		2		2*	4		☆☆☆
		30-31		2		2*	4		☆☆
		32		1		4	4		☆☆☆
		33		1		4	4		☆☆☆
第6問	A	34-35	対話（長）：対話を聞き要約選択、応答選択	2	4	3	6	14	☆☆
	B	36-37	対話（長）：4人によるディスカッションを聞き賛否数、意見を表す図を選択	2		4	8		☆☆☆
本試験平均点 59.45 点				37	100				